

二〇二〇年度口語詩句新人賞・奨励賞推薦について

○林 桂

一〇作品を一編とする応募は三四編（奨励賞応募を含む・のち二編辞退）である。年間佳作推薦一〇編以上の応募資格取得者は七七人（応募資格のない新人賞受賞者が一人いるので、厳密には七六人）なので、奨学生応募とあわせて考えれば、約半数の応募となる。応募が目的ではなく、純粹にこの投稿を楽しむことを目的とする作者が半数いるということでもあろう。

一〇作品単位の審査ということで、改めて読んで佳作として推せる作品を積み上げ、半数を超えるものを第一次候補と考えて選考した。結果一三編を第一次として残した。この中に奨学生応募と重複し、奨学生候補として推薦した作品が四編含まれていた。新人賞推薦相当の上位三編の評価であれば残そうと考えていたが、該当者はいなかったため、奨励賞よりも奨学生を優先する意味で、ここで選考の対象からはずした。残りは九編である。推薦枠は順位をつけずに一〇編までということなので、このまま推薦条件を満たす編数となったので、この九編をそのまま候補として推薦することとした。一編を補うことも考えたが、最初の設定基準を変更せず、一編少ない九編のままとすることにした。

なお、応募該当者は三五歳まで、それ以上は一〇年以内の創作経験者である。前回は、確認できない三五歳以上を選考の対象外としたが、今回は一〇作品の応募制であり、応募資格の有無は後日事務局が確認するということなので、今回は応募作品全てを審査対象とした。

審査作品は作者名を伏せて送付されてくるが、九編を確定してのち、作者を調べさせていただいた。

その結果は、次のとおりである。代表的な作品とともに紹介する。

〈新人賞・奨励賞推薦〉(順不同)

●加藤美紀(四一歳)愛知県

柚子シロップ

氷砂糖が溶けていく

わたしの故郷は

雪が降っている

●亀山こうき(二九歳)千葉県

桜東風象も象使いも眠る

●うすしか(二九歳)東京都

葬式の帰り

妹はまだ泣いてて

わたし

田んぼ数える

●ベロニカ(二六歳)神奈川県

並木道

落葉の乾く甘い香は

亡き祖母の居た部屋に似ていて

●春町美月(四四歳)大阪府

水泳バッグを蹴り蹴り歩いた

あの時のうなじの熱を

今なら孤独と呼ぶだろう

●呉田 稔(二六歳)福岡県

手を洗うのは祈りに似ている

●桜望子(二六歳)千葉県

閉じかけた

朝顔の花の色の濃く

いつでも

死んだ人ばかり思う

●青野椰栄（二二歳）東京都

父に子猫の名前を聞いてみる

●山口航平（二五歳）東京都

母が見せてくれた

僕の母子手帳は

まるで詩集のようだった

☆作者の自選と、私が推したく思っていた作品と齟齬を感じる場面もあった。その意味では、私の推しと自選が重なった人が残ったということかもしれない。九編とそれ以外を分けたのは、そのような微妙なことかもしれない。それは他の選者の場面でも起こっているであろう。ひとつの方法の中では避けられないことだろう。

ともあれ、一年継続した全ての作者を讃え、感謝したい。